

インド洋の首飾り ―モルディブに暮らす―

ダイビングインストラクター(元高等学校英語教師) 伊藤 知津

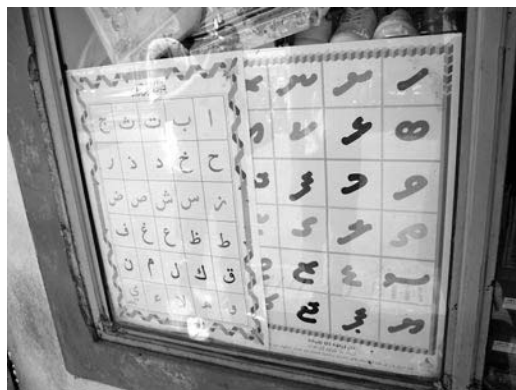
1. モルディブ共和国と日本

英語、フランス語、日本語が使えて世界中で働くことのできる職種を見つけた。ダイビングインストラクターである。元々教えることが好きだし、生徒たちの国、年齢、経歴もさまざまなので、いろいろな出会いも楽しめる。今年からはモルディブで働いている。

今、私の暮らしているモルディブは、インドとスリランカの南、インド洋に浮かぶ1,190の島からなる国である。そのうち200島が無人島であり、87島がリゾート化されている。残りの903島がローカル・アイランドである。面積は298km²で、佐渡島の約0.38倍である。地形上26の環礁から成り立っていて、通常環礁1つで1つの行政区をなす。人口は約30万人であるが、その3分の1は首都マレに在住している。公用語はサンスクリット語を基本としたディベヒ語(アラビア語と同じく右から左に読み書きする)であるが、首都マレやリゾート島では多くの人々が流暢に英語を話す。それもそのはず、幼稚園から高校まで国語と宗教(イスラーム)以外の科目は全て英語で行われるのである。大学はないが、人々は教育熱心で、多くの親はローカル・アイランドから子どもを首都の高校に送って教育を受けさせる。識字率はなんと、98%である。

主要産業は漁業および観光で、対日貿易ではおもにモルディブからまぐろ、かつおなどの魚介類を輸入し、日本からは一般、電気、輸送機械や自動車を輸出している。貿易額はモルディブからの輸入額が輸出額の約3倍になる。日本はモルディブの主要輸出国の4番目なので、モルディブの主要貿易相手国となっている。モルディブへの邦人観光客数は2005年に23,269人で、イギリス、イタ

リア、ドイツに続いて4番目である。経済協力もわが国は積極的で第一の主要援助国であり、政治的にもモルディブの独立以来、日本との関係は良好である。



店頭にあるアルファベットボード
(左はアラビア語・右がディベヒ語)

2. イスラーム (イスラム教)

宗教は100%スンニー派ムスリム、すなわちイスラームである。1153年にイスラームが渡来する前は仏教が普及していた。16世紀にはポルトガルによって15年と6か月支配され、1887年から1965年までイギリス保護国だったが、キリスト教は普及されなかった。



首都のイスラミックセンター

執筆している現在はラマダーンで、このイスラーム暦の9月は30日間の断食をする月だ。これは、貧しくて飲み食いが十分にできない人々の苦労を知るために、実際に飢えや渇きを経験するのである。徹底する人は、唾も飲まないで吐き捨てるという。日の出から日の入りまで妊婦や病人を除き、食べ物を食べず水も飲まない。9歳から12歳までの子どもは1日おきに断食をする。平均気温30℃の国で食べ物を食べないことは何とかできて、水を飲まないのは大変なことである。建設業などの炎天下で行われる労働作業が、ラマダーンの期間スロー・ダウンするのもうなずける。この月は就業時間が変わり、政府関係のオフィスは午前9時から午後1時半までになり、民間企業も午後3時に閉まる。ほとんどすべてのレストランや喫茶店も日中は閉まり（首都マレでこの期間に日中に営業しているレストランは、なんと1軒だけである）、この期間に路上で飲み食いすることは禁止されている。これは、断食をしている人々に尊重を示すためである。

日が沈むとラジオからアナウンスが流れ、人々は静かに食事を始める。昔からの伝統で、断食の後の食事はダーツという大変甘い木の実を干したのから始める。ダーツは中近東から輸入される。その後、22時にティー・タイムをとって、裏ごしした魚と野菜でできたケーキやブレッド・フルーツのフライ（味は淡白なポテト・チップスのような感じ）や、香辛料であるカルダモンという実の入ったカスタード・ソースなどの軽食をとり、深夜の1時に朝食をとってから就寝する。献立はマス・リハというツナ・カレーやツナ・サラダ、ローチというクレープのように薄いパン、おかゆ、サモサなどである。この期間は家族、親類や友人同士でこの遅いティー・タイムや大変早い朝食を、お互いに招待しあって一緒に食べるのが習慣である。

イスラームでは男性は4人の妻を持つことが許されているが、それは4人ともすべての側面において平等に扱うことのできる場合だけである。既婚者が新しく妻を持ちたい場合、現存の妻に相談して全員から承諾を得ないとならない。したが

って、複数の妻を持つよりは離婚をして再婚をすることを选ぶほうが簡単、とみなす傾向が増え、モルディブの離婚率はかなり高くなってきている。

3. リゾート

モルディブのリゾートがユニークなのは、1つひとつのリゾートが独立していて、1つの島に1つのリゾートしか存在しない点である。ほとんどすべての島はモルディブ政府の所有であるが、そのうちのいくつかは数人のモルディブ人たちが出資し合って政府から買取り、リゾート会社にレンタルしている。リゾート会社はもちろん外資系がほとんどであるが、外国人は島を買えないのである。世界的に有名な外資系ホテルも多く入っていて、島に滞在する限り、それぞれの島が小さな国のように独立している印象を受ける。どのリゾートも水と電力は自給していて、ごみ処理施設も備えている。

たとえばリーティラ島にあるワン・アンド・オンリーというリゾートには132のコテージがあって、ビーチに面しているコテージや水上にたてられたコテージがある。その他、ジムやスパ、大変お洒落なレストラン、バー、スイミング・プールが点在している。白砂とアクア・ブルーの遠浅ビーチの風景はまるで楽園のように美しい。リゾート・スタッフはなんと650人で、世界24か国からのスタッフもそれぞれの専門業に従事している。世界中から著名人や王室の人々が、お忍びで休暇をとりに来るのもうなずけるほどの高い顧客サービスを保っている。

現地の人々の休暇は、1年働いて1か月の有給が与えられるので、出身の島にあまり帰らない人が多い。モルディブの医療システムはあまりよくないので、病気になるとインドの病院に行く人が多いため、万が一のために休日をためておく人も多い。インドやスリランカから出稼ぎに来ている人もわりと多く、彼らは自国より物価の高いモルディブで数年働き、里帰りして家を建てるのだそう。島であっても携帯電話やインターネットも使えるので、故郷との交流手段は整っている。